

## 宗祇の古今伝受における切紙について

小 高 道 子

古今伝受において切紙が重視されたことは広く知られている。古今伝受における切紙について、『図書寮典籍解題 続文学篇』（以下『解題』と略す）は、次のようにいう。

初は専ら古今集二十巻の訓読解釈乃至証本の授受がその全てであつたが、時代が降るに随つてこの他に所謂切紙、別紙、口伝が付随し、独立して、遂に古今伝受は内容的に、古今集全巻講釈聴聞と切紙口伝の面授口決の二が重要な要件となつた。元來切紙、口伝とは、疑義、異説のある歌、句、語について特に補注補説された貼箋、切紙乃至以心伝心的な口決口伝が、その一般的講釈の席からとり除かれて、別個単独の面授口伝せらるるものをいふ。随つて何處までも講釈が本体で、切紙口伝は付隨的なものであつた。しかし室町期に入つて、この主従は却つて一面逆の立場におかれ、面授口決には厳かな儀礼が伴つた。

宮内庁書陵部に伝わる細川幽斎が収集した古今伝受の切紙を影印翻刻した橋本不美男氏もこれを踏襲した。

### 一 川瀬一馬氏説

川瀬一馬氏は、烏丸光広の古今伝受資料（宮内庁書陵部蔵）に含まれる「切紙本寸法二ツ」とする小紙片をもとに、切紙について次のように記された。

烏丸光広の古今伝受資料には「切紙本寸法二ツ 永正五戊辰十一月二日伝之」とする包紙に小紙片四枚が含まれている。この小紙片について川瀬一馬氏は「元來はかかる小紙片に切紙の内容が書かれていたのである。一枚の料紙にしたためる機に改められたので原形を示す用意としてもとの切紙の寸法を記録として残したものである」とされた。この細長い小紙片に切紙の内容がしるされていたというのであ

る。そしてこのことから、切紙の発生について次のごとく記されている。<sup>(2)</sup>

切紙とは、元来一枚の紙を小片に切紙したものを指すのである。従って、書物の中に注記など書込む際に張紙などを行って書添へをするその小紙片もまた切紙を用ひるわけである。その切紙に記した部分を本体の書冊から取りはづせば、その紙片は必要な記載を持った切紙となる。本体からその部分だけ離れた扱ひにするには好都合の形式である。古今伝授の切紙も、古今集の本文と注釈との伝授が主体である以上、もとは小紙片に記るされた別紙であつたに相違なからう。

その後、切紙については、この川瀬氏説が継承されている。例えば、新井栄蔵氏は次のように記し、その後の古今伝授研究においては、新井氏説が引用されている。<sup>(3)</sup>

中世でのありふれた学問伝達方式の一つで、本に添付すれば付箋となり、張り合わせて続き紙にして巻けば一巻となり、これを折れば折り本となり、別途に続けて書写すれば一冊（帖）の本になる」ようなものをいうのであつた。

## 二 小紙片と切紙

それでは「切紙本寸法二ツ 永正五戊辰十一月二日伝之」と記された小紙片二紙は、その寸法の小紙片に切紙の内容を記したのであろうか。古今伝授の切紙は最奥の秘伝であり、三センチメートル足らずの幅の小紙片にメモして書き込めるほど簡略ではない。しかも、切紙はそれぞれの古今伝授において、師から弟子へと相伝された整然とした体系を持っている。小紙片にメモした貼り紙を寄せ集めて成立したと考えにくい。こうしたことから、これらの小紙片は、切紙の縦と横との寸法を記したものと推定すべきであらう。<sup>(4)</sup>

宗祇を継承する三流の古今切紙を比較すると、三条西実隆が継承した切紙に、切紙の寸法が記されている。また、細川幽斎が継承した切紙を書写する際には、智仁親王が寸法を記していることがある。このように、切紙の寸法は、切紙を伝える際にそのまま伝えられた重要な事項であつた。肖柏に伝えられた切紙に含まれる小紙片は、切紙の寸法を示すためのいわばものさしであつたと推定すべきであらう。切紙は、門弟が聞書したメモを集成したものではなく、古今伝授の奥義を体系化して、別紙に記して相伝した、古今伝授における最奥の秘伝であつたといえよう。切紙の内容については、稿を改めたい。

### 注

(1) 『古今切紙集』（京都大学国語国文学部資料叢書40）解説（昭58 臨川書店）

- (2) 「古今伝授について——細川幽斎所伝の切紙書類を中心として——」  
〔青山学院女子短大紀要〕16、昭36・11)
  - (3) 新井栄蔵(横井金男・新井栄蔵編『古今集の世界』世界思想社 昭)
  - (4) この小紙片については「烏丸光広の古今伝受」〔近世文学俯瞰〕平
- 9 汲古書院)において検討を加えた。

